

現地理解教育への取り組み

上海日本人学校浦東校 教諭

前弘前大学教育学部附属中学校 教諭 大湯 由香利

キーワード：宿泊学習 現地校との交流 日中友好 国際社会で生きる力 中国語の授業

1. はじめに

上海は中国経済の中心都市で、アジア最大の国際都市ともいわれている。2010年には万国博覧会も開催されることになっていて、非常に活気に満ちている。上海日本人学校は、数年前から児童・生徒数の増加が著しく、多いときは1年間で400名を超える増加を示し、平成17年度中には児童・生徒数が2200名を超す世界一規模の大きい日本人学校となった。平成18年度4月に上海日本人学校浦東校が新設され、中学部生徒の全てと小学部児童の一部が浦東校に移った。編入学児童・生徒は全て浦東校へ編入することになっている。ちなみに、既存の上海日本人学校は虹橋校と呼ぶことになった。浦東校は、平成18年9月6日現在、小学部児童489名、中学部生徒431名が在籍し、中学部は1学年が7クラス、2学年が5クラス、3学年が3クラスの規模である。

本校の『学校経営の基本方針』の中の「本年度の指導重点と観点」に、“在上海の特性を生かし、中国、上海の街や人材を学習活動に取り入れ、現地校や国際校との交流、人々とのふれあい、中国理解、自己理解、人間理解を深める児童生徒の育成を図る。”や“中国の自然、歴史、社会、文化学習を一層推進する中で日中間の歴史、共通点、差異等の理解を図り、以て日本理解を更に深め、日本人としての自覚と誇りを高め、人権と共生、国際平和教育の推進に努める”とあり、どの学年でも現地理解教育を意識した取り組みをしている。以下に、中学部2学年の取り組みを中心に活動の実際を紹介する。

2. 活動の実際

(1) 宿泊学習

本校では、小学部6学年と中学部3学年で修学旅行、小学部5学年と中学部1・2学年で宿泊学習を行っている。現地理解を深めることや社会性を身につけること、良好な人間関係の構築をねらっている。

中学部2年生は、平成18年6月7日～9日、南京・蘇州で2泊3日の宿泊学習を行った。旅行社から3名（日本人2名、中国人1名）と1クラスに1名現地ガイドが随行し、移動は全て貸し切りバスを利用した。このときの取り組みについて紹介する。

① 侵華日軍南京大虐殺遇難同胞記念館の見学

昨年度は、4月の抗日デモによる外出制限や中学部2学年宿泊学習（南京・蘇州）延期、10月の抗日運動のおそれによる小学部6学年修学旅行（北京）での日程変更など、中国の人達の抗日の思いを実感する場面もいくつかあった。その思いの背景にあるものを知り、また、平和について考えていくことは、現在中国で生活し、将来日中友好の架け橋となることを期待されている生徒にとって、とても大事なことであると考えた。また、日中友好のみならず、国際社会で良好な人間関係を築きながら活躍し、さらに平和な世界をつくる一員となるためにも、見学を意義あるものにしたと考えた。

侵華日軍南京大虐殺遇難同胞記念館は、日本軍の蛮行を知らしめるための記念館で、就学前と思われる小さい子どもから戦争を体験したと思われるお年寄りまで、幅広い年齢の人たちが皆静粛に熱心に見学している。展示されている資料はとても残酷で生々しいものが多く、出口のところでは涙している中国の女子学生もいた。本校の生徒にとって、ただ単にショッキングな体験として終わらないように事前学習を大事にした。また、本

校の生徒の中には親が中国国籍の生徒も少なくなく、そのことも考えに入れながら学習を進めた。

事前学習では、まず、本校の国際交流ディレクターから、日中間の戦争とその背景、中国の人たちは日中の戦争の歴史をかなりの教科書のページ数でかなりの時間をかけて学んでいること、また、その教科書の内容はいかに残虐な仕打ちを受けたかかなり詳しく書かれていること、けれども、中国の人たちは現在の日本人に対しては好意的であることなどを具体的な例を示しながら話してもらった。生徒たちからは「今まで知らなかった。調べたり見学したりしてもっと知りたい。」「中国では、学校で日本軍がしたことを詳しく勉強しているのに、知り合いや店員さん等、自分の周りの中国人はみんな優しい。もっと中国の人と仲良くなれるようにしたい。」「こんなひどいことが二度と起きないようにしたい。」などの感想が聞かれた。

次に、南京大虐殺についてのビデオを観た。日中間の戦争について研究されている静岡大学平和学講師・中国ハルビン市社会科学院客員研究員の森正孝さんから戴いたものである。社会科担当のスタッフが、事前学習の準備のために読んでいた書籍で森さんのことを知り、連絡をとったところ、ちょうど上海に行く用事があるので会いましょうということになったそうである。ビデオは、当時の日本兵だった方や被害にあった中国の方の証言をまじえて南京大虐殺事件について語られたものである。生徒たちに見せる前に、学年スタッフ全員でビデオの内容をチェックした。大人の私たちでも、見終わった後はずしりと重い空気に包まれた。生徒たちも感じるであろう気持ちの負担をなくし、平和について考えを深めるという目的に向かうように配慮した。ビデオ視聴後、教師3名が補足説明とビデオを観ての思いを語った。そして生徒全員が折り紙の裏に平和へのメッセージを書き、それで折り鶴を作った。

当日、記念館で、見学に先立って平和集会を行った。生徒の進行で黙祷をし、花と千羽鶴を捧げ、代表生徒が平和への誓いを日本語と中国語で述べた。現地の人たちが見守る中、集会は厳粛な雰囲気で行われた。

事後学習として、生徒たちは「平和のためにできること、なすべきこと」というテーマで話し合い、自分の考えをまとめた。大変難しいテーマであるが、生徒たちはなぜ戦争になるのかから自分たちなりに考え、日頃から「相手のことを良く理解しようとする事」「差別などをなくし相手のことを尊重すること」「自己の利益 追求のため相手を傷つけてはいけないこと」「命を大切にすること」「平和のために自分ができることがないか、これからも意識して考えていくこと」等々の意見が出た。

② 文化体験学習

南京で、雨花石プレスレット作り、京劇面の絵付け、瓢箪画、焼き絵、南京ごま、雲錦（絹織物）の小袋作りの6つのコースから生徒が選び、体験した。講師の方の作品や技に触れ、中国文化の素晴らしさを知ることができた。また、どのコースも心配りのある準備をしてくださっていて、生徒たちは簡単すぎずそれでいて出来映えに満足した様子であった。雲錦の小袋作りでは、日本語を話せない講師の方が、本校の体験学習のために日本語での説明を丸暗記して臨んでくださったことにも感動した。



生徒が絵付けをした京劇面

③ 歴史・文化的施設の見学

南京では侵華日軍南京大虐殺遇難同胞記念館の他に、中国の「国父」と呼ばれている孫文の陵墓である中山陵や中国に現存する最大の城門で日中戦争とも関わりのある中華門を、蘇州では水郷や世界文化遺産に指定されている庭園の一つ拙政園、呉王闔閭の陵墓である虎丘、張継の詩『楓橋夜泊』で有名な寒山寺を見学した。

事前の調べ学習、宿泊学習での見学や体験、また、その見学や体験から生徒自身が設定した課題の追究とそのまとめや発表によって、中国文化や歴史等についての理解を深めることができた。

(2) 現地校との交流

① 相手校の決定

上海市の小学校や初等中学校（日本の中学校にあたる）では、教師は授業と子供たちのテストの点数で評価され、給料にも関わってくるそうである。そこで、日本人学校との交流よりは、より高い得点を目指して日常の授業を優先させたいという考えもあるのだろう。交流の申し入れを引き受けてもらえないことも多く、以前の国際交流の担当者は大変な苦勞をしたそうだ。中国語が堪能で中国をよく知る国際交流ディレクターが配置された平成16年度から、きめ細かな交渉の結果、全学年での交流が実現したそうである。現在、国際交流ディレクターは虹橋校と浦東校の2校の教育活動に関わっている。

今年度開校した本校の交流相手校探しの交渉は、校長と通訳の現地事務スタッフによって進められ、浦東校でも全学年で交流会ができることになった。

② 現地校との交流のようす

今年度はまだ交流会が行われていないので、昨年度担当した小学部6年生の、虹橋中学校との交流会の様子を紹介する。中国では小学校を5年級までとして日本の小学6年生にあたる子どもたちは中学校で学ぶことも多く、上海はこの形式を採用している。昨年度の本校小学部6学年は7クラスで、虹橋中学校の6年級は5クラスだったので7年級からの2クラスを合わせての交流となった。全体で、あいさつやお互いの文化披露をした後、それぞれのクラスに分かれて遊び交流をした。日本の遊びを紹介し、一緒に遊ぶという企画であったが、各クラス和気藹々と楽しく交流できた。



虹橋中学校の生徒が披露してくれた武術体操

私が担任していたクラスでは、虹橋校側で、果物を切って皿に盛りつけ、その飾り方のテーマを発表し、それをグループで競うというゲームを準備してくれていた。どうやって日本の遊びを紹介しようかと少しどきどきしながら準備を進めてきたクラスの子どもたちであったが、相手のもてなしの心を感じ取って自然に一緒に果物を切りながらゲームを楽しんだ。学校に帰る途中、準備したけど使わなかったねと少し残念そうではあったが、予定とは違ったことになっても、相手の気持ちを考え、臨機応変にその場を楽しむことができる子供たちの姿勢がうれしかった。

7クラス中6クラスは初めから歓迎ムードであったが、1クラスだけ、日本の遊びを紹介しようとしている児童を前に、相手校の子供たちは窓辺で外を眺めたりおしゃべりしたりで全く交流する姿勢が見られないクラスがあった。それでも、せっかくだからと日本人学校の子供たちがけん玉やお手玉、折り紙などで遊び始めたところ、相手校の子どもたちも興味をもって集まってきて一緒に遊び始め、打ち解けた雰囲気になっていったということである。くさらず、怒らず、結局は相手の気持ちを引き寄せた子どもたちの力、また、初めは乗り気でなくても日本の子どもの様子を見て気持ちを寄せてきた虹橋中学校の子どもたちの力を感じた。

中国では、日本に比べ、予定通りにならないことが多いように感じる。それは中国だけでなく、他の外国でもそうであると聞いたことがある。言葉も通じにくい中、例え予定通りにいなくても相手のことを理解しよ

うとし、新たな展開を楽しみ、相手と友好的な関係を結ぶことができる力は、まさに国際社会で生きるのに必要な力といえるのではないだろうか。

現地校には交流会を歓迎していない教師もいることを認識させられたと同時に、交流会の意義も改めて実感できた。

③ 中学部 2 学年の取り組み

昨年度の上虹中学との交流会では、上虹中学の生徒が受けている授業に本校生徒が参加し、本校教員が上虹中学の生徒に授業する、交換授業を行った。今年度は、生徒たちがお互いの考えを出し合い、価値観の共通点や相違点を認識して相互理解を深めるための、パネルディスカッションを行いたいと考えていた。しかし、相手校との話し合いにより、今年度は交流 1 年目でもあるし、一緒に中国結びや中国切り絵等を体験する交流会にしようということになった。先日、本校の担当者が国際交流ディレクターと一緒に相手校に打ち合わせに行ったが、今度は、是非日本人学校で打ち合わせをして学校の様子も見せて欲しいと、交流に積極的である。

④ 部活交流

中学部で行っており、本校の剣道部やサッカー部、バスケット部男子、美術部、音楽部などが、現地校の有志の生徒と交流する。

⑤ 上海日本人学校主催中国語・日本語中学生スピーチ大会

「日中友好の一助とするとともに、広く国際理解を深める機会とする」「相互の語学力向上を図る」ことを目的に開催されている。日本と中国の関わりについて、「友好親善」や「同世代に訴えたいこと・未来の展望に関すること」をテーマに、本校の生徒 8 名が中国語で、現地校で日本語を勉強している生徒約 8 名が日本語で行うスピーチ大会である。甘泉外語中学、上虹中学、上海外国語大学附属外国語学校、上海中学を招いて行っている。中学部全生徒が参加し、弁士以外の生徒も中国語で日本の歌を披露する。

(3) 中国語の授業

小学 1 年生から中学 3 年生までの全学年で、レベル別のクラスに分けて、週に 1 時間行っている。1 クラス 15 名以下の少人数になるように配慮している。子どもたちの中国語のレベルは多様である。基礎も会話も高いレベルの子、会話はできるが基礎がきちんとできていない子、数年中国に住んでいてある程度話せる子、ほとんど話せない子等である。浦東校では、中国語教室から講師を派遣してもらっている。講師たちは中国語を教えることに関しては経験があるが、学校で教える経験はない。中国語が堪能な本校の中国語担当教員が、子供たちのレベルや授業の内容、学校で教えるにあたって気をつけて欲しいことなどをきめ細かく話し、普段も中国語講師とよくコミュニケーションをとりながら進めている。

また、中学部 2、3 年では、中国語と英会話から選択する語学選択も週 1 時間行っている。中国語、英会話ともに検定対策コースと会話コースが数コースずつあり、生徒はその中から 1 コースを選び学習している。

3. おわりに

保護者や地域の方も、子どもたちの成長のため学校教育活動に協力的な方が多い。PTA 主催のチャレンジタイムや上海で活躍している多様な職業の方に、その方の生き方や職業観についてお話ししていただく等の活動も行っている。チャレンジタイムとは、児童・生徒の発達段階に合わせて中国文化の鑑賞や体験を校内で行うもので、PTA の学級役員の方たちの企画・運営によって行う。今年度、中学部では京劇鑑賞を予定している。

上海日本人学校に勤務した諸先輩方が積み上げてきた実績、日本各地や現地から集まったパワーあふれる現職員達の力で、現地の人々や現地で活躍する邦人、PTA など関わった様々な活動ができていると思う。今後、児童・生徒がより現理解を深め、より国際社会で生きる力を高められる学習活動を目指し、努力していきたい。